

次々と新型に変異するコロナウイルスに人間社会は翻弄されている。特定のウイルスに対応したワクチンを開発しても変異した新型には有効ではない場合があるからである。生物の重要な特徴である自身で複製を生成して増殖する能力が欠如しているウイルスは自身以外の生物の細胞を利用して増殖するので生物ではなく、物質との中間に分類されている。

その増殖のとき正確な複製に失敗したのが新種であるが、この能力によりウイルスは地球で三〇億年も生存してきた。地球表面がマイナス六〇度以下になり、生物の九割以上が絶滅したスノーボールアース（全球凍結）でもウイルスは絶滅しなかった。せいぜい数百万年の歴史しかない人間が対抗するには困難な相手である。

この変化することの重要さを生物学者C・ダーウィンは「最強の生物が存続するのではなく、最賢の生物が存続するのではなく、存続できるのは変化できる生物である」と喝破している。自身の変化によって環境に適合したもののみが存続できるのは生物社会だけではなく、経済社会や行政社会にも共通する原理である。

一八八一年にG・イーストマンが創業した企業コダックは八八年に一〇〇回撮影できるロールフィルムを装填した箱型カメラ「No.1コダック」を販売し、撮影が終了したらカメラごと会社に返送すれば現像し紙焼きした写真と新規にフィルムを装填したカメラを返送するというビジネスを発明して一気に躍進した。

その後もカラーフィルム、一六ミリフィルムなどを開発した独創あふれる会社であったが、イーストマンの死後、世界最初のデジタルカメラを発明していたにもかかわらず、自社の既存のビジネスに影響すると秘密にしていたためデジタル時代の潮流に出遅れ、二〇一二年に上場廃止となり、大幅に規模を縮小した。

一方、一九三四年に創業した富士フィルムも社名のように写真フィルムの生産と販売が祖業であるが、合併や買収などによって複写装置、医療機器、医薬品などに次々と事業を展開し、現在ではフィルム関係の業績は全体の1%でしかない。変化できるものが存続できるというダーウィンの言葉を象徴する企業である。

現在の日本社会の停滞は変化できない構造に原因がある。一例が人口減少である。一人の女性が生涯に出生する子供の人数である合計特殊出生率が二・〇七以上が人口維持の条件であるが、日本は一九七五年に二以下になって以来、減少の一途で、昨年は一・三四にまで低下した。このまま推移すれば三〇年後には一億人以下になる。

一方、フランスやスウェーデンのように一旦は一・七〇程度まで低下したものの、最近では二近くまで回復している国家もある。いくつかの要因があるが、日本と極端に相違するのは高率な婚外子率である。二〇一六年の数字で、日本は3%弱であるが、フランスは60%、スウェーデンは55%と半分以上である。

この欧米との差異の原因は日本の伝統観念も影響しているが、社会に未来を想像する能力と改革を決断する胆力が欠如していたことである。今回のコロナウイルスへの対応でも早期に最悪の事態を想像できず、ワクチンを確保する決断も出遅れた。不平の表明だけでは責任回避であるが、変化する意欲を一人一人が意識することこそ日本再生への原点になる。